

1. 研究の背景と目的

(1) 「考えの形成」について

平成29年告示の小学校学習指導要領における、国語科の改訂の要点の一つに「考えの形成」の重視が挙げられる。その背景には中央審議会答申¹の「文章で表された情報を的確に理解し、自分の考えの形成に生かしていけるようにすることは喫緊の課題である」²、「変化の激しい社会の中で未来を創り出していくためには、多様な情報や考えを理解して、文章や発話により表現したり、個人や集団としての考えを形成したり深めたりしていくために必要となる、言語能力や情報活用能力の向上が重要な課題となってくる」³等の記述が関連している。〔思考力、判断力、表現力等〕の各領域において学習過程が整理・明確化されたが、「A 話すこと・聞くこと」「B 書くこと」「C 読むこと」の全ての領域において共通している学習過程が「考えの形成」であり、いかに重要な指導事項として位置付けられたかがうかがえる。

「考えの形成」に至るまでには以下のように多くの学習過程が必要であると考えられる。

- ・対象となる情報の内容を正しく理解する。
- ・その中から着目すべき内容を焦点化する。
- ・必要に応じて、複数の内容を関連させる。
- ・その内容に対する自分の考えをもつ。
- ・考えた内容を他人に伝わりやすく表現する。

この複雑な思考形成を要する「考えの形成」の力を、授業を通して児童に確実に指導するためには、より綿密な教材研究や指導計画が必要になると考える。

(2) 「書くこと」の活動について

青木幹勇は「書写」を「第一の書く」、「作文」を「第二の書く」、そしてそれ以外の聞きながらメモを取ることや、重要な文を書き抜いたり、話す内容を事前に書きまとめたりすることを「第三の書く」と位置付けた⁴。青木はこの「第三の書く」について、「聞くこと、話すこと、読むこと、言語事項の学習を支え、さらに、

両翼の第一、第二の書くとつながりをもつという仕組みになっている」⁵と述べ、「書くこと」の活動が重要であるとしている。

また輿水実は、日記等の経験したことを書く「生活作文」に対して、学習した内容について書く「学習作文」を提唱したが、その学習作文に関して進藤らは「思考力の養成には、『思考としての、探求としての作文』（＝学習作文）を多く書かせることが有効であり、必要である」⁶と述べ、さらに学習の要点をまとめたり、分かったことを書かせたりする等の「書くこと」を通して、その学習は一層深まり強化され、思考力の向上が期待される」⁷と述べている。学習作文の評価に関しては、評価の観点を書かせる前に明らかにされているので、その評価も速く、客観的である⁸としている。

以上のように、国語科の学習における「書くこと」は、児童の思考を深め、自身の考えを客観化できるという特性から、「考えの形成」の指導において有効なものではないかと考えた。

本研究の目的は、この「考えの形成」の指導を効果的に行うための「書くこと」の活動を中心にした具体的な方法を、小学校第5学年における実践から考察するところにある。

2. 児童の実態

本校の第5学年の児童（2学級、54名）が4月に行った学力調査や普段の学習状況から、知識・技能面においては、確実に基礎・基本を身に付けている児童と、下学年で学習した漢字が定着していない児童が見られる等、学力の両極化が見られた。思考力・判断力・表現力等の力においては、読み取った内容を条件に基づいて書きまとめるという問題において、普段から解き慣れていないためか、正答率が低く無回答率も高くなっていた。また、3学期はじめにアンケート調査を実施したところ、「書くこと、作文」を苦手と回答した児童が33名おり、多くの児童が「書くこと」の学習に対して苦手意識を抱いていることが分かる。

3. 実践の概要

本実践は、東京書籍『新しい国語 五』の「資料を見て考えたことを話そう」で行った。食品ロスに関するグラフや表、写真等の計6種類の資料が掲載されており、これらの資料を関係付けて考えた内容を、相手に明確に伝わるように話すという学習内容である。教科書には資料の他に、考えをまとめる際のヒントとして、「資料から分かったこと」や「(そこから自身が)考えたこと」をまとめたメモの例、実際に学級で発表した内容の例が掲載されている。

本単元は、本来は「話すこと・聞くこと」の学習として設定されている。しかし単元計画の段階で、複数の資料の内容を読み取り、それらを関連付けて自分の考えをまとめ、それを話すという活動は難易度の高いものであると感じた。「考えの形成」の段階を丁寧に指導しなければ、話すことはできても果たしてその内容が真に「考えの形成」が達成されたものなのか、発表した児童もそれを聞いた児童も内容を吟味することのないまま、また指導者もそれを丁寧に評価することのできないまま学習が終わってしまうことが懸念された。前述したように「考えの形成」に至るにはいくつもの思考形成を経由しなければならない。この「考えの形成」を全ての児童が達成するためには、まず「書くこと」の活動を通して自分の考えを書きまとめることが必要であると考えた。そのため、本単元を「書くこと」と「話すこと・聞くこと」の関連学習として計画した。(以下に「単元の目標」や「単元の指導計画」を挙げるが、最終的には新型コロナウイルスの感染拡大により、第3次の「話すこと・聞くこと」の学習活動を行うことができず、今回は「書くこと」のみの学習となった。)

◇単元の目標

○情報と情報との関連付けの仕方について理解することができる。

【知識及び技能：(2) 情報の扱い方に関する事項イ】

○食品ロスに関する資料から分かることを簡単に書いたり詳しく書いたりするとともに、自身の意見とを区別して書くなどして、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができる。

【思考力、判断力、表現力等：B 書くことウ】

○食品ロスに関する資料を効果的に活用するなど

して、自分の考えが伝わるように表現の工夫をすることができる。

【思考力、判断力、表現力等：A 話すこと・聞くことウ】

○食品ロスに関する資料から考えたことを書きまとめ、それを話す活動を通して、自分の思いや考えを伝え合おうとする。

【学びに向かう力、人間性等】

◇単元の指導計画 (全5時間)

次	時	学習活動
1	1	・学習課題を確認する。 ・食品ロスに関する動画を視聴する。
2	2	【ワークシート①】 ・「資料を見て分かること」を書く。
	3	【ワークシート②】 ・「二つの資料を関連させて考えたこと」を書く。
	4	【ワークシート③】 ・ワークシート①②の内容を集約させ、自分の考えが相手に伝わりやすいように文章を書く。
3	5	・ワークシート③の内容をもとに発表し合い、学習の振り返りをする。

4. 指導の実際

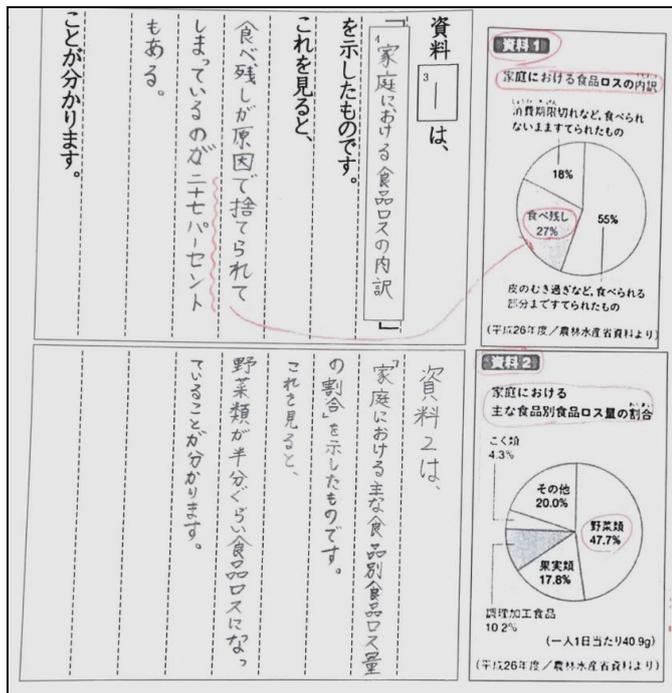
第1次では、教科書に掲載されている資料の内容を簡単に確認するとともに、単元の学習課題を共通理解した。さらに本単元の題材である「食品ロス」について理解を深め、資料の内容をスムーズに取り出すことができるよう、インターネットの動画サイトから食品ロスについての児童向けの動画を視聴した。

第2次では、筆者が作成した3枚のワークシートを用いて「考えの形成」がスモールステップで達成できるように指導した。

まず、ワークシート①では「資料から分かること」を書く練習をした。ワークシートは、教科書に掲載されている6種類の資料のうち4つを取り上げ、それぞれについて「資料の番号」「資料の題」「資料から分かること」を文型に沿いながら書きまとめる形にした。記入の際には、資料の内容と文の内容がどのように対応しているのかを把握しやすくするために、資料と言葉を線で繋げさせたり、資料のどの部分に着目したか

を確認するために資料中に印を付けさせたりした。また、一つめの資料については記入欄を穴埋め形式にして、学級全体で一つ一つの項目を確認しながら記入させた。二つめ以降の資料については一つめの資料の記入内容を基に、児童が個々に学習を進められるようにした。

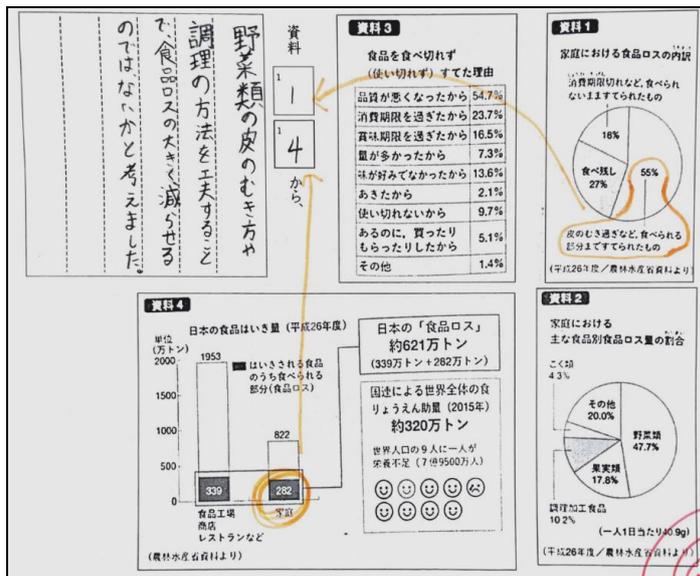
ワークシート①で多くの児童に見られたつまづきが、「資料の着目した部分をどのように書き表すか」ということであった。「資料1」は「家庭における食品ロスの内訳」を示した円グラフである。「食べ残し、27%」の部分に着目した場合、【図1】の児童は「食べ残しが原因で捨てられてしまっているのが27パーセントもある」と記述できているが、「食べ残しが27パーセントだ」のように、資料が示している内容に関連させることなく、着目した部分の言葉と数値を繋ぎ合わせただけの記述になってしまっている児童も多く見られた。個別に記述させた後、改めて学級全体でより分かりやすく書く方法について具体例を挙げて指導した。授業後、ワークシートは回収し、誤字脱字や表現の工夫等について個別に添削をして返却した。



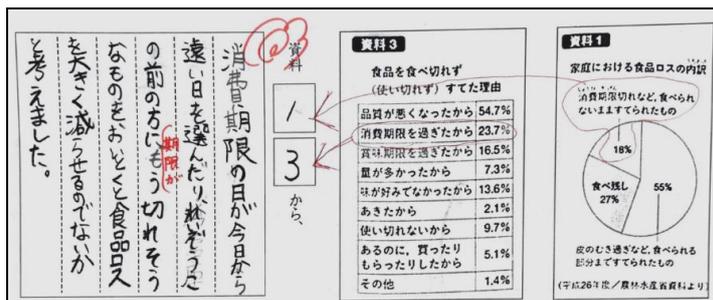
【図1】ワークシート①（児童記入例）

ワークシート②では、二つの資料の内容を結び付けて考えられることを書かせた。この活動は、本単元の「考えの形成」の学習過程の中心にあたる部分である。教科書に掲載されている資料から4種類から、どの資料のどの部分に着目するかを決定させる（2か所）。着目した部分の内容を結び付け、「資料そのものには示されていない、児童各自が考えた内容」を書かせる。

この部分の理解が重要になるため、まずは学級全体で具体例を一緒に確認しながら学習を進めた（【図2】）。その後、個々に着目する部分2か所を自由に選択させ、そこから考えた内容を書かせた（【図3, 4】）。



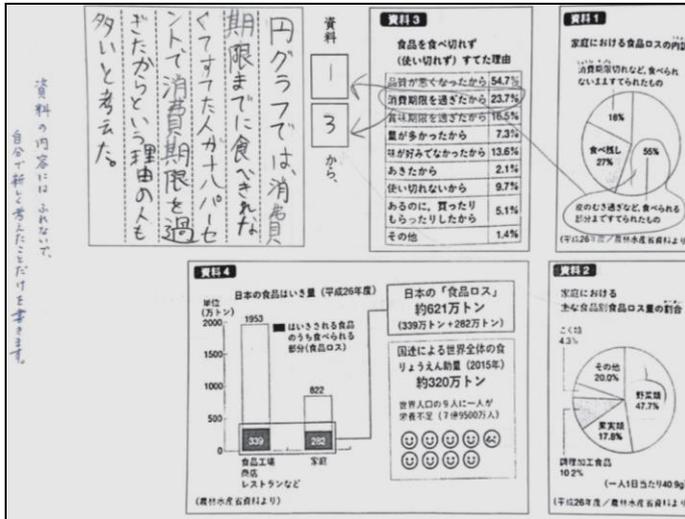
【図2】ワークシート②-1（共通確認部分）



【図3】ワークシート②-2（児童記入例、添削は筆者）

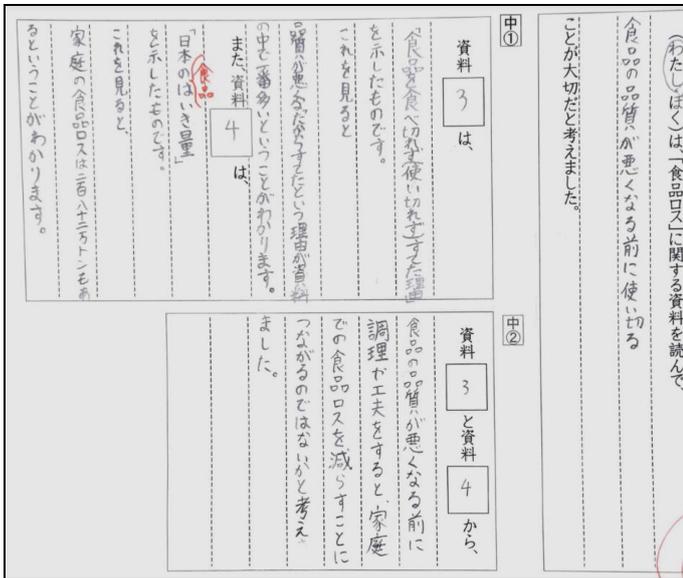
【図3】には「(食品を買う際に)消費期限の日が今日から遠い日を選んだり、冷蔵庫の前の方に期限が切れそうな食品を置いたりすると食品ロスを大きく減らせるのではないかと考えた（一部内容を変更）」とあり、「選択した資料そのものには示されていないが、資料を結び付けて新たに考えられる内容」が記述できている児童の例である。

一方、【図4】の児童はワークシート①で学習した内容を混同しているのか、資料の着目した部分（「資料から分かること」のみ）を記述しており、児童自身の考えが示されていない。【図4】のように資料に示されている内容を自分の考えであるかのように記述してしまう児童が全体の3分の1ほど見られた。このワークシートについても授業後に回収して筆者が添削を行い、書き直しが必要な児童には個別指導を行った。



【図4】ワークシート②-3 (児童記入例, 添削は筆者)

ワークシート③では、ワークシート①②の内容を集約させながら発表する内容をまとめた。構成を「はじめ-中①-中②-おわり」とし、「中①→ワークシート① (資料から分かること)」、「中②→ワークシート② (二つの資料を結び付けて考えたこと)」とし、既習事項を想起すると児童が各自の力で書きまとめられるようにした。「中①」と「中②」を先に記述した後に、「はじめ (自分の考えの中心)」と「おわり (今後、どのようなことに気を付けて生活したいか)」を全体の内容が繋がるように記述させた。



【図5】ワークシート③-1 (児童記入例, 添削は筆者)

第2次においてワークシート①②を通して「資料から分かること」、「二つの資料を結び付けて考えたこと」の記述の仕方を丁寧に確認しながら学習を進めたことで、ほとんどの児童がこれまでに使用したワークシートの内容を参照しながら自分の考えを書きまとめることができた。

また、「中①、②」と「はじめ」「おわり」の内容を

うまく繋がるように書くことができなかった児童も見られたが、全体を改めて読み直すように促すと、その多くの児童が内容の食い違いに気付き、各自で訂正することができていた。

【図6】ワークシート③-2 (児童記入例)

5. 実践内容の考察と今後の課題

本実践を通して明らかになったのは次の二点である。まず、児童の実態に即して綿密に計画を立てワークシートを作成することの必要性である。「書くこと」に苦手意識をもつ児童がスモールステップで学習を進められるワークシートを用いたことで、学習をスムーズに進めることができた。次に、「考えの形成」における「書くこと」の活動の重要性である。「書くこと」の活動を中心にして指導を進めたことで、児童が自身の思考形成の足跡を確認しながら学習を進めることができた。さらに思考が文字として残ることで、児童一人一人の理解度を指導者が確実に把握し、丁寧に指導を行うことができた。多くの学習過程を必要とする「考えの形成」の指導には「書くこと」の活動が有効であることが明確となった。

一方、「書くこと」の活動を行うにあたり、誤字や脱字、主語と述語のねじれ等、基本的な事項が定着していないことで「書くこと」に苦手意識をもっていると思われる児童が多く見られ、大きな課題であると感じた。各単元の〔思考力、判断力、表現力等〕の力を支えるのは確実な言語事項の力である。今後、指導者にはより高い〔思考力、判断力、表現力等〕の力を児童に身に付けさせるための授業研究と同時に、これまでと同様、基礎・基本の定着の指導により一層力を入れていくことが求められる。

※本研究は、筆者が令和3年度に行った実践をまとめたものである。

1 文部科学省「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」中央教育審議会(答申)、2016年12月
 2 1に同じ、p.6-7
 3 1に同じ、p.85
 4 青木幹男『復刻版 第三の書く～読むために書く 書くために読む～』東洋館出版社、2020年10月、p.12-13
 5 4に同じ、p.14
 6 進藤徳雄、小野達朗、清水邦雄、橘田常男、八巻令一「学習作文の研究成果」(興水実、山梨北巨摩国語研究サークル『学習作文の指導と文例』明治図書、1978年6月)p.21
 7 6に同じ
 8 6に同じ、p.24